

医学研究所が全国の共同研究者を一堂に集めて交流を促す「発生医学の共同研究拠点」活動も兼ねて、平成二十六年九月四〜五日(木・金)の二日間にわたって開催しました。

iPS細胞の樹立以来、再生医療に対する期待が高まっていますが、一方で細胞に液性因子をふりかけるだけの錬金術的研究も散見されるのが現状です。今回のシンポジウムでは、発生の詳細な理解が最終的には再生医学につながるという理念のもとに、幅広い発生・再生学領域から、国内外の第一線の研究者を招聘しました。海外からは Randy Johnson (テキサス大学、米国)、Ed Stanley (オーストラリア)、Henrik Semb (デンマーク)、Benjamin Dekel (イスラエル)、Francois Guillemot (UK)、Yosuke Mukoyama (NIH、米国)、Erika Matunis (Johns Hopkins 大学、米国)、Alexander Medvinsky (UK) の八名を、国内からは須田年生、佐藤俊朗(以上慶応大学)、丹羽仁史、猪股秀彦、森下喜弘(以上理研)、瀬原敦子、山田泰広(以上京都大学)、吉田松生(基生研)、武部貴則(横浜市大)の九名、さらに学内から佐々木洋、白木伸明、太口敦博、日野信次朗を合わせ、計二二名の講演が行われました。肝臓、膵臓、腎臓、脳、血液、血管、生殖細胞、消化管、筋肉、ES・iPS細胞、エピジェネティクス、バイオイン

フォーマティクスといった幅広い分野の最先端の研究成果が発表され、活発な討論が行われました。例えばショウジョウバエとiPS細胞の研究者との議論も非常に有意義でした。またこれを機に始まった共同研究もあります。

もう一つの仕掛けとして、次世代の国際的ネットワーク形成のために、招待講

演に国内の多くの若手研究者を抜擢しました。六三題に上るポスター発表者にも各自一分以内で概要を口頭発表してもらったところ、大学院生を含む若手の緊張と初々しさが伝わってきて好評でした。その後ポスター会場では二一時過ぎまで活発な議論が続けられました。地方大学でこの規模のシンポジウムが開催されることは珍しく、ポスター会場が常に満場だったことから、若手研究者の交流とモチベーション向上に役立ったと確信しています。海外からの招聘者も日本の若手研究者の熱意と実力に驚嘆していました。

本シンポジウムは(延べではなく実数で)一八五名もの参加者を得ました。ご支援、ご指導、誠にありがとうございました。肥後医育振興会、大学院医学教育部、発生医学研究所、博士課程教育リディングプログラムHIGO、生命科学系国際共同研究拠点、科学技術振興機構CRESTの皆様にも心から感謝致します。

第十四回熊本大学医学部医学科医学教育ワークショップを開催して

熊本大学医学部医学科長

安東 由喜雄

本学医学部医学科によるFDワークショップは、二〇〇〇年に第一回が開催されて以来、昨年度で第十四回を迎えました。第一回のワークショップは市内のホテルで二日間にわたって開催され、尾島昭次医学教育学会会長(当時)、畑尾正彦副会長(当時)、倉本毅高知医科大教授をタスクフォースとしてお迎えし、

新しいスタイルの医学教育の在り方を学びました。耳慣れない専門用語に大変戸惑いながらも、ノーネクタイですべての参加者を「……さん」と呼び合う職位の垣根を取り払ったスタイルのやり方に医学教育の新しいあり方の息吹を感じ、大変新鮮な気分を味わったものでした。

このようなワークショップが開かれるようになった背景には、二十年ほど前から全国的に始まった医学教育改革のウエーブがあります。従来、わが国の医学教育は各大学の独自性に任されてきましたが、近年の生命科学の発展や臨床医学の進歩、医学、医療を取り巻く環境の大きな変化に対応するためには、全国共通の医学教育を行う必要があるという理念が広く受け入れられるようになり、平成十三年に医学教育モデル・コア・カリキュラムが制定されました。このカリキュラムでは、医学部で習得すべき学習内容の三分の二程度をコア化(標準化)し従来の学問体系別ではなく、統合型(臓器・系統別)カリキュラムとしたことが大きな特徴でした。そこでこのような新たな教育体制に対応するため、

チュートリアル教育やPBL (Problem Based learning) などの新しい教育手法が導入されてきました。これに伴い、新しい教育カリキュラムや教育手法を導入するために、医学科教員の教育能力の向上を目標として、全国的にFDワークショップが開催される運びとなりました。更に悩ましい問題が生じてきたのは、アメリカの医師国家試験にあたるECFMGの受験資格が、医学教育の国際認証を受けた大学の卒業生にのみ与えられるとする取り決めがなされ、二〇二三年以降これが適用されるという問題です。全国医学部長・病院長会議では、全会一致

で、各医学部はこれを取付するとする決議が行われております。熊本大学でも二〇二〇年までには現行の医学教育を改変し、国際認証に叶うものに進化させなければなりません。

このような背景の中、第十四回のFDワークショップは、千葉大学大学院医学研究院医学部、医学教育研究室教授、田邊政裕先生をお迎えし、「医学部分野別認証とアウトカム基盤型教育」のご講演をいただいた後、「教育成果基盤型教育と医学教育認証制度」、「いかに学ばせるかを考える(教授・学習法)」をテーマに九時から一七時二〇分まで約四十名の基礎、臨床の教員、研修医、医学生、事務の方々のご参加をいただき活発なディスカッションが行われました。

末筆となりましたが、本医学教育FDワークショップの開催に際し、プランニングから円滑な運営に携わってくださったました、古川昇先生、谷口純一先生に心から感謝申し上げますとともに、ご支援をいただきました肥後医育振興会に御礼申し上げます。

